
Go to Magic World

彦星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G o t o M a g i c W o r l d

【Nコード】

N 0 0 1 9 U

【作者名】

彦星

【あらすじ】

あの、題名英語で格好つけてますが、要するに、主人公が魔界へ行くという話です。

「オイコラ作者！いくらなんでも

短くまとめ過ぎだろ！もつと真面目にしろよ！」

どーせ文才ありませんよー

「開き直るな、書き直せえええ！」ボコボコボカンをいって、あらすじで作者殴るなんて酷いな！

この物語は、主人公が魔界へ行くという内容の話です。

「変わってねー!」

不定期更新です。予めご了承ください。

あと、戦闘描写少ないです。あってもクソですorz

更新については「彦星」の活動報告をご覧くださいませ。

登場人物（竜）紹介（前書き）

新キャラ登場するたび、更新する予定です。
見なくても、本編はだいたい理解できると思います。

登場人物（竜）紹介

強さはランクS〜Cまであります。（EXは規格外の強さです。）
ふつうはランクBです。魔力は平均でMP1万くらいです。
ATKは攻撃力、DEFは守備力、MPは魔力、BRIは頭脳、L
UKは運です。

佐藤竜介

性別「」 種族「人&竜」 出身地「日本、東京」 魔力「MP
2500万」

種族「火 水 雷 木 風 光 闇」

この物語の主人公。父親は竜王で、母親は伝説の賢者。
小さいころから親はいなかった。

少し前までは普通（？）の中学2年生だった。

頭はいいが、勉強することは嫌い。

・人間の姿

ATK S

DEF S

MP EX

BRI S

LUK C

・ドラゴンの姿

ATK EX

DEF EX

MP S

BRI A

LUK B

川島裕太

人 日本、大阪 MP8000 雷

竜介の小学生の時から親友で、同い年。

頭もよく、テストはいつも450点以上。

コンピューターやメカに強く、その気になれば、

アメカの軍事施設もハッキングできちゃう。

父親は川島財閥の社長さん。

ATK A

DEF A

MP C

BRI S

LUK B

ルーン・アーノルド

竜 竜王国、ドラディスト MP31万 火 闇

代々竜王に仕えてきたアーノルド家の長女。

次期竜王に仕えるホワイトドラゴン。

普段はしっかりしているが、たまに抜けている。

ATK A

DEF A

MP S

BRI B

LUK A

マリー・ドラゴン

人 アイド王国、ライト MP4000万 火 水 雷 木
風 光 闇

勇者と旅をしていた伝説の賢者で、竜介の母親。
今は亡くなっている。

ATK B
DEF B
MP EX
BRI EX
LUK S

レン・ドラゴン

竜 竜王国、ドラティスト MP50万 火 光 闇

竜王国を治めていた第124代竜王で、竜介の父親。
今は亡くなっている。

ATK EX
DEF EX
MP S
BRI B
LUK B

ロイト校長

人 アイド王国、イント MP30万 水木風光

ロイトナ王立魔法学校の校長。

てきとーだが、意外と強い?!

ATK S

DEF S

MP S

BRI S

LUK B

ウイルト25世

人 アイド王国、ライト MP25万 火風光

アイド王国の王子様。白馬が似合いそうな金髪の美少年だが、あまり頭はよくない、というのがDクラスにいる理由。

将来は、国王の後を継ぐ………予定。

ATK S

DEF S

MP S

BRI C

LUK S

メアリー・エスPOWER

人&魔族 デモン帝国、イール MP28万 水木闇

母親が人間で父親が魔族の魔人で赤眼紫髪の少女。

暗い過去があったが、今は気にしないようにしている。
10中8、9は振り返るほど可愛いが、少々殺気と魔力を放っている…。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| L | B | M | D | A |
| U | R | P | E | T |
| K | I | | F | K |
| A | A | S | S | B |

設定資料（前書き）

これも内容が増え次第更新していく予定です。

設定資料

世界

科学界：通称「科界」。人類は電気を発見し、

科学が発展した。

つて、知ってるかw

魔法界：通称「魔界」。科学の代わりに魔法技術が

発達し、日常生活に取り入れている。

2つの大陸に10カ国ある。

国

日本：国土は約38万平方キロメートルで、使用言語は日本語。

GDPは世界3位の経済大国で、治安は安定しているが、

政治は不安定。世界一の赤字国債を保有している。

国民の99.99%が人間。

首都「東京」 人口「約1億3000万人」 同盟国「アメリカなど」

アイト王国：国土は約55万平方キロメートルで、使用言語はアイド語。

北の大陸の南に位置し、平均気温は17。

政権はウィルト家が握っており、治安は安定している。

北西に大きなキヤ森があり、北に山脈、南は海に面している。

敵国はルシーダ帝国とスラン皇国。国民の80%が人間。

首都「ライト」 人口「1億5000万人」 同盟国「ロス国、コルニア共和国など」

竜王国…国土は48万平方キロメートルで、使用言語は竜語。

南の大陸の北に位置し、平均気温は22

国民の100%がドラゴンで、竜王が治めている。

人間との交流はなく、永世中立国である。

王都「ドラゲイスト」 竜口「1億匹」 同盟国「なし」

種族

人間…特徴として、社会を形成する傾向、

文化を持っていること、言葉を使うことなどが挙げられる。

人間は文字や言語を抽象的なシンボル（象徴）として扱った

り、

論理思考（論理学）を行い、多様な事象に様々な解釈を行う。

多くの研究者の主観では知能は地球上の全ての生物の中で

最も高度であると考えられている。

Wikipediaより

ドラゴン…体は巨大で、3m～10mある。全身が硬い鱗でおおわれ、

最強の種族のひとつ。

主人公は「龍」ではなく、「竜」すなわち西洋のタイプ

である。

竜人は自分の意志で姿を変えられるが、ドラゴンフルーツを

食べるか、感情が暴走すると竜の姿に戻る。

天使…神に仕える生き物で、人間より優れている。

頭に光輪と、背中に白い翼をもつ。

人間と友好的である。

魔族…かつて魔王に仕えていた種族。善心を持つものは少なく、他の種族を殺したりしている。人間との関係は悪い。

妖精…光り輝く羽をもつ、体長約30cmの種族。

魔王によって現在はほぼ絶滅している。

エルフ…妖精と似た種族で、力は弱いですが、魔力が大きい。

しばしば魔族に奴隷にされるが、人間の国でいきている。

魔物…森や草原など魔界に広く分布し、人間を襲う。

さらに細かく分類でき、単独の種族や、群れをなしたりもする。

ドラゴンは魔物にはいるという国もある。

学校

学校名…ロイトナ王立魔法学校

場所…首都ライトのやや南

広さ…本校舎、東校舎、南校舎、北校舎、闘技館、校庭があり、合わせて広さは東京ドーム10個分ぐらい。

授業…国語・社会・魔法・戦闘の4教科。ただしテストは国・社・魔の3教科。

作者

彦星…文才はないが、実はイケメン・・・って
ちよつと待つて、「戻る」おさないでよ
自己紹介してないからここでしておこうかと
出身は大阪です。大阪はいいところですよ
言っときますけど、大阪人で自分のこと「ワイ」っていう人
ほとんどいないですからね。
好きな言葉は「お金」です
どーぞよろしくです。

設定資料（後書き）

誤字や脱字、あと感想があればお願いします。

魔法大辞典（前書き）

補足つくるのめんどくさいんで、まとめました。

最上級魔法はあるんですが、ここで載せると
完全ネタばれになっちゃうんで、もう少しお待ちください。

魔法が増え次第、ちょこちょこ更新していきます。

魔法大辞典

火属性：基本五魔法の一つで、攻撃に長けている。

？下級

「ファイ」：火を起こす魔法。消費MP3000

「アタップ」：攻撃力を上げる魔法。消費MP5000

？中級

「ファイル」：火の玉を相手に投げつける魔法。消費MP6000

「ファイルス」：火の壁をつくる魔法。消費MP10000

？上級

「ファイルグラウンド」：巨大な火炎柱を地面から立てる魔法。消費MP6万

？最上級

今は見せられません。のちに書き込みます。

水属性：基本五魔法の一つで、守備に長けている。

？下級

「ウォタ」：飲料用の水をつくる魔法。消費MP2000

「ディフェップ」：守備力を上げる魔法。消費MP4000

？中級

「ウォタル」：水の玉を相手に投げつける魔法。消費MP5000

「ウォタルス」：水の壁をつくる魔法。消費MP9000

? 上級

「ウォタルグランド」：高圧の水で相手を包む魔法。消費MP5万

? 最上級

今は見せられません。のちに書き込みます。

雷属性：基本五魔法の一つで、俊敏性に長けている。

? 下級

「サンダ」：発電する魔法。消費MP2000

「スピップ」：瞬発力を上げる魔法。消費MP4000

? 中級

「サンダラ」：電気玉を相手に投げつける魔法。消費MP5000

「サンダラーク」：雷雲をつくる魔法。消費MP8000

? 上級

「サンダラグランド」：雷雲をつくり、巨大な雷を当てる魔法。消費MP3万

? 最上級

今は見せられません。のちに書き込みます。

木属性：基本五魔法の一つで、回復系に長けている。

?下級

「リカバ」…傷を癒す魔法。消費MP3000

「プランテ」…植物さんとお話するの。消費MP0

?中級

「リカバロ」…傷を治す魔法。消費MP5000

「グラス」…蔓を相手の体に巻きつける魔法。消費MP9000

?上級

「リーフグラウンド」…植物の葉を操り、相手の体を傷つける魔法。
消費MP4万

?最上級

今は見せられません。のちに書き込みます。

風属性：基本五魔法の一つで、物体浮遊に長けている。

?下級

「フライ」…自分の体を空中に浮かせる魔法。消費MP1000

「フロート」…物体を浮かせる魔法。消費MP2000

?中級

「ウイン」…風を起こす魔法。消費MP4000

「ウインド」…大風をおこす魔法。消費MP7000

?上級

「ハリケグラウンド」：巨大な竜巻をつくる魔法。消費MP2万

? 最上級

今は見せられません。のちに書き込みます。

光属性：上等二魔法の一つで、滅多にいない。

? 下級

「フラッシ」：暗闇を光で照らす魔法。消費MP8000

? 中級

「レイ」：高熱の光線を放つ魔法。消費MP3万

「ガルタ」：結界をつくる魔法。消費MP2万

? 上級

「オベディオ」：物や生物を服従させる魔法。消費MP12万

? 最上級

今は見せられません。のちに書き込みます。

闇属性：上等二魔法の一つで、滅多にいない。

? 下級

「テレポー」：瞬間移動の魔法。消費MP5000

? 中級

「ナイメア」：相手を眠らせ、悪夢で唸らせる魔法。消費MP4万

「ダアク」：相手を闇で包み込む魔法。消費MP5万

? 上級

「グラビット」：重力を変更する魔法。消費MP12万

無属性：呪文の提唱が不要な魔法。

手で円を描く：翻訳魔法。消費MP1万

相手に伝えるイメージ：念話魔法。消費MP1万5000

手で先を3回内に寄せる：取寄魔法。消費MP2000

手を広げそこから三角形をつくる：時間停止魔法。消費MP10万

古属性：古代から存在する魔法。

「トラント」：物体変形の魔法。消費MP5000

「ラセパレーン」：姿消の魔法。消費MP5万

「カムリニークリット」：物質創造の魔法。消費MP3万

「ミグリニストアリア」：世界渡の魔法。消費MP10万

魔法大辞典（後書き）

本編の載せていることと違う箇所もありますが、
こちらが正しい方です。

誤字・脱字報告はいりません。

第0話 プロローグ（前書き）

どうも、作者です。

いや、初投稿なんでかなり緊張してます。

前置きは長くなるので省きます。

主人公は佐藤竜介。東京で一人暮らしの中学2年生である。

親は物心ついた時からいなくて、小3まで孤児院にいた。

一人暮らしで時間が無く勉強が出来ないというのが、

テスト合計点297点の理由である。

とまあ、主人公紹介はこんなものでいいかあ。

「佐藤竜介ってありきたりすぎだろ！もっといい名前にしろよ。

このネーミングセンスゼロが！」

主人公は阿保之助に訂正します。

「……。ゴメンナサイ。佐藤竜介デイドス。」

分かれはよろしい。しょせん架空の人間が

現存する人間にはむかおうなどt・・バコっ！

・・・・いてて、では本編へ

第0話 プロローグ

ここは2・3の教室だ。もう5月だというのに、友達も彼女もいない。悲

「おい、誰と話してんねん？」

おっと訂正、一人いた。

こいつの名前は川島裕太で、大阪出身である。

テストはいつも450点以上なのがムカつくが、俺の親友である。小学校のときに出会ってからずっと親友である。

(友情的な出会いの話は、また今度書きます。)

「いや、別に。」

「んじゃ、一緒に帰ろーや。」

そうしていつもの様に帰ることにした。

数分歩いて、足を止めた。

いきなり目の前に茶髪で緑色の目の少女が現れたからだ。

「マ、マイネームイズリユースケ。」

彼女は聞こえているのかいないのか、ずっと俺を見つめていた。

「下手糞やなあ。どいてみーや。」

H i . I . m y u t a . W h a t . s y o u r n a m e ? 「

おおー、さすが裕太だ。だがしかし、彼女は全く反応しなかった。

「あれ、伝わらんなあ。C a n y o u s p e a k E n g l i s h ? 「

すると彼女が口を開いた。

>あなたがリユースケ様ですか？<

聞いたことの無い言葉だったが、理解出来た。

>そ、そうだけど、君は誰？<

「ちよ、リユースケ何語喋ってんねん?!」

彼女は、次に耳を疑うようなことを言った。

>私はルーン？アーノルド。ホワイトドラゴンです。

あなたを迎えに来ました。<

ん、この子何言ってるだろう？救急車呼んだほうがいいだろうか？

>あゝ、疑ってますね？ひとまずここを離れましょう。「テレポー

「<

突然、目の前の景色が変わって、森の中にいた。

>信じさせてあげましょう。「カイトス」<

彼女の姿が消え、白い竜が現れた。つて、え？これは夢？
自分の頬をつねってみたら、痛かった。

「やばい、食われるー!!!」

補足：「テレポー」瞬間移動の魔法。ドラクエというルーラ。“闇”

「カイトス」変身解除の呪文。“古”

“ ” 内は属性

多分 to be continue かな。

第1話 魔法界へ

ご覧くださった方の数が予想を遙かに超えてました。ワイイヽ(〇^)/

ちなみに予想は3人くらいでした。

「低っ」とか思わないでくださいよ？私の中ではものすごいことだ
と思ってますからね。

そんな暇人様のためにも続きます。

暇人なんて呼んですいません???

「食われるー!!!」

思えば短い人生だったなあ。

こんなところで空想の生き物に食べられて死ぬなんて???

「うえーん、ママあゝ」(某猫型ロボットマンガのお金持ちの少年

風に)

ホワイトドラゴンが話しかけてきた。

>あの、なんか勘違いしてませんか？<

>え！？食べるんじゃないの？<

>いやあの、ドラゴンは人間を食べないですよ？
というか、あなたもドラゴンですよ？<

??????????。

何を言ってるんでしょうか？

理解不能ですねえ。この人????

じゃなかった、この竜、頭おかしいんじゃないのか？

>え、もしかして知らなかったんですか?!

「ご自分が次期竜王だということを。」

> 知らないも何も、そんなこと信じられる訳ねーだろ。 <

「カイトス」

ホワイトドラゴンは人間の姿になった。

> はあゝ。仕方ない、この方法を使いましょう。 <

彼女はカバン（前から持っていた設定）から赤い果実を取り出した。表面はチクチクしていて、ちよつと不気味だった。

どこかで見ることがあると思ったら、テレビで見たドラゴンフルーツにそっくりだった。というか、それです。

それを彼女は二つに割って俺に差し出した。

> これ食べて下さい <

言われるように食べた。食べなきゃ食べられる気がしたんだ。

決して言いなりになったとかそんなんじゃないことないんだからな。

OTZ

ぱくつと一口食べてみた。口の中にほのかな酸味と甘味が広がった。

結構おいしいじゃん

次の瞬間、心臓がドクンと脈を打った。

「うっ！！！！うわあああああ！！！！」

か、身体が熱い！

全身で何かが起こっているのがわかった。

瞳孔が縦長くなり、胴体も長くなった。

背中からは黒い翼が生え、腕と足は短く、爪は長くなった。

そして角が生えると全身が黒い鱗に包まれた。

ブ、ブラックドラゴン？！

>これで信じました？つまりですね、あなたのお父様、レン・ドラゴン様は竜王国の竜王で、あなたのお母様、マリー？ドラゴン様は伝説の賢者です。

お二人共、10年以上前に亡くなりましたが??????。

だから、リユースケ様は人と竜のハーフです。

ちなみに呪文なしで人間になれますが、

ドラゴンフルーツ食べるか、感情が暴走すると

ドラゴンに戻りますからね。 <

もうどんな事実でも驚かないかもしれない。

>で、そのルーンさんは何しにきたんだ？ <

>あ、ルーンでいいです。私、あなたにお仕えする身ですから。で、リユースケ様には次期竜王として、勉強してもらいます。ちなみに、王国の国民のため、拒否権はありませんからね <

もう勝手にしてください。こっちはいろいろパニックってるんだよ！

>で、どいぢゃいいの？<

>魔法界のアイド王国です。<

え、その竜王国ってどこに行くんじやないのか？と思った方、説明しておく、竜王国に学校はありません。というか、国民全員ドラゴンなんで、必要性がありません。ということですよ。

>では、行きますよ。「ミグリニストアリア」<

グオングオングオン

ヒュルルルル〜ドーン！

?????意識が遠のいていく?????????????。

気がつくと、地面の上で寝ていた。ルーンと手をつないで?????。

ルーンは息を切らしながら、頬を赤らめた。

>ハアハア、結構魔力消費しました。

???????い、行きましようか?????。

その前に翻訳魔法かけておきましょう。「」<

ルーンは空中で指で円を描いた。

「あれ、呪文唱えないのか？」

「無属性は呪文唱える必要ないんですよ。」

あ、この際、魔法の study time にしましょうか。

魔法はみんな使える無？古の2属性と、

その人によつて使えるのが違う火？水？雷？風？木の基本五魔法、
光？闇の上級二魔法、

合わせて7属性があります。

たいがい一人1属性ですが、2つ以上属性がある人もいます。竜は
必ず火属性は持っています。ちなみに私は火？闇です。

属性にはそれぞれの特徴があります。

また、その属性ごとに下級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法
とあり、

上がるにつれて消費魔力も多くなります。

人によつて持つている魔力量も違い、平均でMP1万、ベテラン賢
者で10万くらいです。

つて、寝てますね！」

Z Z Z 。

「起きて下さい、学校にいきますよ。」

バシッ！ 頬をビンタする音

王子の扱いわるいなあ。

補足：「ミグリニストアリア」…世界渡の呪文。科学界と魔法界を
行き来する。

古属性、MP10万消費。（人間はこの魔法を知らない設定。

）
「指で円を描く」…翻訳呪文。無属性、MP1万消費。

世界設定の話ばかりですいません。詳しい内容はまた資料編として
まとめます。

第2話 入学（前書き）

ども。

かなり更新遅れてすいません。

言い訳させてください。

1か月でテストが4回あったんです。

もういDARUすぎです……。

あしーたはテスト、あさーってテスト、らいしゅうもーテスト

本編どうぞ。

第2話 入学

ぜえぜえ、到着〜！

ここまで2時間歩き続けたぜい。
ルーンによると、この国では、竜も魔物の一種だから飛んで行けな
いらしい。

しかし、門でけー！
でもってこの学校自体でけー！

門には、「ロイトナ王立魔法学校」と書かれている。

ロイトナ王立魔法学校…首都ライトのやや南にある、この国で2番
目に大きな学校。

本校舎、東校舎、南校舎、北校舎、闘技館、
校庭があり、

合わせて広さは東京ドーム10個分くらい。
(某映画、眼鏡をかけた魔法使いの少年が
通うお城みたいな学校のイメージで)

門をくぐり、「校長室」へいく。

> いまから、入学手続きをします。 <

> 緊張するうゝ <

トントン

「失礼します。」

「誰じゃ?」

「はじめまして、ルーンという者です。」

ん? 待てよ??? ???

> 「はじめまして」「って、くること言っ
てなかったのか?! <

> 忘れてました。

それより、あまり童語を使わないでください。 <

「何をごちゃごちゃ話しているん
じゃ? 用件は何じゃ?」

「すみません。あのですね、

この学校に私たちを入学させてください。」

率直すぎだろ！そんなので出来る訳ηηηη？

「では、入学手続きをしてもらおうかの。」

OKだよ！この校長適當すぎだろ！！

というか、こんな人を校長にする学校が適當すぎだろ！！

「まず属性測定と魔力測定をするんじゃ。」

校長は、水晶玉を渡してきた。

ありきたりな測定だな……。

「手をかざすのじゃ。」

水晶玉にさつと手をかざしてみた。

ピカーン！

水晶玉が七色に光り出した。

七色といっても虹色ではなく、赤色、青色、黄色、緑色、水色、白色、黒色、の七色だ。

「属性は、火、水、雷、木、風、光、闇、じゃな。」

「全部じゃない！さすがリユースケ様。」

「次は魔力測定じゃ。」

校長は、はかりのような物をもってきた。

あれ、水晶玉じゃないの？

「どつじゃ、最新型の測定器じゃぞ。」

MP999万9999まで測れるんじゃない。25Gするんじゃないぞ。」

手を置くと、

ぐるぐるぐる〜

はかりの針が勢いよく回り出した。

30秒くらい経って、やっと止まった。

「0を指しとるから、MP0じゃな。Cクラスにはいるんじゃない。」

ルーンはMP31万あった。すごいっすね。

「すごい魔力量じゃ！ダントツSクラスじゃ。」

すると、ルーンが怒り…いや、キレだした。

「なんでリユースケ様と違うクラスなんですか！

同じにして下さい!!でないところの学校潰しますよ!?!」

.....恐ろしい子。

「わかった、わかった。おなじくくらすじゃ。
明後日から、遅れずにくるように。」

ルーンがいつもの顔に戻った。

「はい。いきましょっか。」

てくてく.....

>あのさ、お願いあるんだけど、元の世界戻ってくれない?
忘れ物があつて。<

>科界ですか?いいですよ。
いきますよ?「ミグリニストアリア」<

グオングオン、ヒューン!

> ハアハア、到着です。 <

俺は家に帰った。

「あつた、あつた。お守り。」

このお守りは、初詣のとき、裕太がくれたものだ。

「いいよ、ルーン魔界にい

ある少年に声を遮られた。

「竜介！お前どこ行ってたねん！」

その少年は、大きなバッグを持っていた。

「裕太！」

てか、その荷物なんだよ？」

「俺、家出したねん。

頼む！俺もつれてってーや。」

え？・・・

第2話 入学（後書き）

感想、アドバイス、ダメだし、その他いろいろ
ドシドシ募集中です。

第3話 裕太の家出（前書き）

評価、ありがとうございます。

petうれしいです¥

誰か、テストというものを無くして下さいませんか？

いやー、それにしても大阪は暑いです。

梅雨で34 は暑すぎでしょ〜

日本中節電傾向なのにクーラーつけてもらいました。

東北の方、すいません（一一）

第3話 裕太の家出

y u t a s i d e

やった、一位や！

これでやっとお父さんに認めてもらえる。

「え、裕太、テスト一位か！すごいな。」

「まあ、勉強毎日10時間したからやねんけどな。そういう竜介は？」

「俺1時間も勉強してないから、というか勉強する気ないから。あはは。」

キーンコーンカーンコーン

あれ、竜介誰かと喋ってる？

「おい、誰と話してんねん？」

竜介は少し間をおいて

「いや、別に。」

と言った。

「んじゃ、一緒に帰ろーや。」

数分歩いて、竜介がいきなり足を止めた。

「なんや、どーしたん？」

「あれ。」

竜介が指さした先には茶髪で緑色の目の少女が立っていた。

「マ、マイネームイズリユースケ。」

彼女は黙ったままだった。

相変わらず、竜介英語勉強してないな

「下手糞やなあ。どいてみーや。

H i . I ' m y u t a . W h a t ' s y o u r n a m e ?

彼女は全く反応しなかった。

え？アメリカ人とちゃうんかなあ。

「あれ、伝わらんなあ。C a n y o u s p e a k E n g l i s h ?

彼女が口を開いた。

「i f v a i a f g v o u h w v f w s t f k t u d t k ?

ほえ？英語じゃなかった・・・

こんなん分かるわけない。どーしよ

すると、竜介が話し出した！

「y d i k d t r r k u t , d c g j j x c g g .」

「ちょ、竜介何語喋ってんねん?!」

彼女は、またわけわからん言語で話した。

「j y u m d r k k y k g y t u g t y t u g f y g r y j s e
s e t s e r a h a h o . x t e s x h t h r d d x h e t z e t
x t e .」

もうチンプンカンプンや。

> c d y d y c f i d c f y e t f c y d f d a y r c d t q s c
f y a d c y r d e q t f ? v y t c f t y d t c f q] t e l e
p o p
< [r o p

彼女が何かを言い終えたとき、その子と竜介が一緒に消えた。

「勉強しすぎて頭おかしくなったんかな？」

その後ひとりで家に帰った。

「ただいま。お父さん、テスト一位やったで」

テストの結果を渡した。

すると、父の口からは予想とは違う答えが返ってきた。

「お前は馬鹿か！こんなテスト、満点取らないと意味ないだろ！なにが1位だ。こんなんじゃ、父さんの会社継げないぞ！」

え・・・

俺は驚いた。まさかこんなこと言われるなんて・・・

涙がこみ上げてきた。

「お父さんのアホ！こんなに頑張ったのに
なんやねん！お父さんなんかきらいや！！」

ボタンッ！

ううっ

そうや、こんな家出てっつてやる。
こんなとこ居たくもない！

俺はかばんにパソコンやゲーム、お菓子をはじめとする食糧と
いろいろな道具をかばんに詰め込んだ。

バイバイ、お父さん、お母さん。

行くあてもなくさまよっていると、目の前に竜介がいた。

「竜介！お前どこ行ってたねん！」

「裕太！」

「てか、その荷物なに？」

「そうや、これしかチャンスはない
絶対つかむんや！」

「俺、家出したねん。」

「頼む！俺もつれてってーや。」

竜介が「マジで?!」みたいな顔をした。

「とりあえず、翻訳魔法かけておく。」

え、魔法ってなんや?!

y u t a s i d e o u t

ryusuke side

手でぐるりと円を描いた。

「紹介するよ、ルーンだ。」

「はじめまして。」

「ええっ、話せるようになってる!」

俺は今までのことを説明した。

「で、魔界に引っついてくるのか?」

「うん、俺には行くと来ないんや。
それに魔法って何か面白そうやん。」

「それではいきますか。」「ミグリニストアリア」

グオングオングオン
ヒュルルルルル〜ドーン！

気が付くと、道にいた。

「じじじじじ？」

「アイド王国、魔界。」

「ほ、ほんまにきちちゃったあ。」

「ではお二人とも、住む家を案内します。」

数分歩くと、大きな門の前に来た。

学校から歩いて10分くらいだろう。

「ここになります。広さはあの学校の3分の1くらいでしょうか？」

宮殿のような豪邸があった。

で、でけー

「こんなでかいとこ、大丈夫か？高いんじゃない？」

「そーや、そーや。1円ももってないで？」

「大丈夫ですよ、リユース様のお母様のお家ですから。」

「お前の母さん、すげえやなあ。」

うん、俺でもすげーと思う。

その家は20LLDKだ。

「で、裕太も学校いくのか？」

「あたりまえや。行くに決まってるやろ」

一応、家にあつた簡易魔力測定器でユータの魔力をはかってみた。

属性は雷。

魔力はMP8000だった。

「平均なんぼなん？5000くらい？」

裕太が笑顔で聞いた。

「……………1万くらいです。」

裕太の笑顔がみるみる崩れていった。

「がーん……………」

「そ、そんな落ち込むなよ、俺なんか0だぜ？」

裕太の顔が少し戻った。

「あ、リユースケ様の魔力はあの測定器じゃはかりきれないですよ。たぶん、MP2000万以上だと思えます。」

裕太の顔がさらに悪化した。

「がががががーん。」

「ばかやろ、今言つなよ！」

その夜、食事は裕太と2人で食べた。

t o b e c o n t i n u e . . .

第3話 裕太の家出（後書き）

竜王国の王都の名前が決定いたしました。

初めてのアドバイス貰ってかなり感激です！

ありがとうございます。

第4話 初登校&初授業（前書き）

やっとテスト期間おわりましたあ

いや、今年はその（ほとんど）誰しもが通る道、
高校受検が待ってるんです！

ちなみに豆知識入れておくと、
私立は「受験」、公立は「受検」が
正しいそうです。知ってたらスマソ

戦闘シーンほんの少しありますが、グロくはないと思われませう。

第4話 初登校&初授業

今日は待ちに待った登校日。

3人で登校時間10分の道を歩く。

緊張するなあ。

「俺、授業ついていけるやるか？」

裕太が心配そうに言った。

「ユータさんならいけるとおもいますよ。」

「あ、ありがとう。なんか1年生みたいな気分だな。」

そっこうしているうちに学校に到着。

「で、でかすぎるやるー！」

「そっか、裕太まだ見てなかったのか。」

東塔の3階に、2・Dと書かれた札が掛けてあった。

教室では・・・

「今日は転入生が二人来ます。皆さん仲良くしてくださいね？」

ワイワイガヤガヤ・・・

「静かに！では、入ってきてください。」

女子の聲が飛び交う中で、男子からは

「『イケメン死ねえええええ！』」

とまあ、ブーイングの嵐がおこった。

なんかこのクラス疲れる・・・

「そういえば君は誰ですか？校長からは転入生は2人と聞いていたんですけど？」

そういえば、忘れていた！

「ええと、彼はリースケ様のお友達で、ユータ・カワシマです。彼もこの学校に入学したいんですが、いいですか？」

そんなの、いいわけが・・・

「いいですよ。大歓迎です？」

・・・もうこの学校だめだ。適當すぎる！

あと、あの教師は語尾にハートマークつけるのどつにかならないの
だろうか？

キンコーンカーンコーン

「これでホームルームを終わります？」

このあと3人はクラスの皆から質問攻めがあったのは言うまでもない。

まだ授業が始まってないのに疲労が・・・

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴ると、眼鏡をかけた教師が入ってきた。

ええと、一時間目は歴史か。

「席に着け、授業をはじめろ。教科書125ページを開け。」

「っ！教科書無い！」

ルーンがちょんちょんと肩をつついてきた。

「段取りはしてありますよ」

ルーンはかばんから教科書全教科を3セット取り出した。

よくやったルーン！ナイス！！

「えー、今から約50年前、突如魔王が現れた。魔王はこの世界を支配した。

妖精は魔王の手によって滅ぼされ、人間やエルフなど、さまざまな種族を奴隷の

ように扱った。このような時代を暗黒の時代と呼ぶ。その後暗黒の時代は30年間続く。

人々は魔王の苦しみから逃れようと立ち向かった。だが魔王に逆らったものは

皆殺しにされた。そして今から20年前、伝説の勇者様御一行が立ち上がった。

勇者『アイド・キングスリー』、剣士『エルソード・ラトウール』、
魔術師『アーリー・ローレンス』、賢者『マリー・サトー』、僧侶
『ロイト・ナトリア』

この5人のお方は次々と魔王軍を倒し、ついに1年後、魔王は倒された。かくして

世界に平和が戻り、勇者の栄光を称え国名を「ウイルト王国」から「アイド王国」に

変わった。というのが、勇者の歴史だ。って、みんな寝るなあ！起きろー！」

いや先生、話長すぎませんか？

10行もぶつとーしでしゃべってますよ？
読者の方、読むのとはしていただいて結構です

「ここはテストに出すからな。」

その後も授業は続いた。

キーンコーンカーンコーン

やっと終わったー

「授業、新鮮でおもしろかったなあ？
校長が伝説の僧侶やったなんてなあ。」

・・・裕太、授業が面白いだと？！
お前の頭どーかしてるぜ！

国語の時間は意味不明だった。

翻訳魔法は話すのには対応しているが、読解・書取は自力というところらしい。

昼休憩、金髪イケメンが俺のもとにやってきた。

「我と戦え！」

何いってんの、この人？

「貴様、聞いているのか？逃げたら許さないぞ！」

めんどくさいことに巻き込まれたあ。

闘技場に強制で連れて行かれた・・・

「我から行くぞ」

シュババババ！

ものすごい勢いで走ってきた。

ビュッ バシッ！ ヒュッ

かろうじてパンチをよけた。

「なかなかやるな。だがこれはどうかな？」「ファイル」

バムッ バムッ バムッ！

火の玉を3つも撃ってきた。

「あぶねっ」「ウォータルス」

水で火を包み込み、消火した。

「我の火玉を止めるだと！？」

「強いけど、今度はこっちから行かせてもらう。」

俺は休憩中に教科書で覚えた呪文を唱えた。

「「サンダラグラウンド」」

「なに、上級魔法だと！そんなこと・・・」

バチバチバチ、ドカーーン！

チツ、よけられた。

次は敵に当てようと思ったその時、

「何やってるんですか！！」

ん？ルーン？なんでここにいるんだ？

「さっきは止めに入ったものの、あなたが暴走したらこの学校どころか

国の1個や2個ぐらい簡単に壊しちゃうんですからね！」

あっちが勝手に仕掛けてきたんですけど？

ルーンはまだ話を続けた。

「それにこの方はこの国の王子なんですからね！」

そうだったのか、どうりで強いわけだ。

「いかにも、我は2-Dのウィルト25世だ。貴様強いな、我の友にならぬか？」

「俺も同じクラスだ。もちろん友になろう。」

ウィルトと握手をした。

キーンコーンカーンコーン

友情のチャイムが鳴ったようだった。

「リユースケ様、授業遅れますよ？」

「ああ！忘れてた！次の授業は戦闘か。」

ん？ちよつと待てよ？

たしか移動教室だったような・・・

「何をあわてておる？ここは闘技場だぞ？」

「あ、そうでした。」

校長が入ってきた。

「授業を始める。」

え、戦闘はこの適当校長なのかあ！！

第4話 初登校&初授業（後書き）

補足：「ファイル」：火の玉を火の玉を相手に投げつける魔法

火属性、中級魔法、消費MP5000。

「ウォータルス」：水の壁をつくる魔法。

水属性、中級魔法、消費MP9000。

「サンダラグラウンド」：雷雲をつくり、巨大な雷を当てる魔法。

雷属性、上級魔法、消費MP3万。

誤字・脱字、感想・批評などあればお願いします。

第5話 校長の過去（前書き）

この小説が連載開始から約1か月が経ちました

ありがとうございますっ

でも、1か月でまだ5話ですね。

ちょっと遅いですが、我慢して下さいませ。

今回は少し残酷な描写を含みます。

苦手な方はご注意ください！

第5話 校長の過去

なんでこんな適当な校長が授業するんだ?!

「せんせい、質問です。」

なんで先生が担当なんですか?」

校長の表情が少し崩れた。

「わしがやると不満かね?

これでも昔は伝説の僧侶だったんじゃ。」

そーいえば、誰かがそんなこといつてたっけ。
信じられないが……。

「まずは実践からじゃ。」

やっぱり授業も適当だなオイ!

普通こつというのは、戦い方とか1から説明するのが筋だろ!!

「じゃあ、わしと、えーと……君じゃ。」

校長が指さした先には、黒目黒髪の男が……

「つて、俺?!」

数あるクラスの人間の中でなんで俺?

「いつでもかかってくるんじゃ。」

「じゃ、遠慮なく。」

シユタタタタ

校長の顔面を殴った。と思っただが

ガシッ!

校長は拳を受け止めた。

「やるのお。じゃがまだまだわしゃ老いぼれとんぞお。」

想像をはるかに超えて強いな。

「これはどうだ!」「アタップ!」「ファイルグラウンド!」

シユイイイイン

ボカ ボカ ボカーン!

3つの火柱の1つが校長にあたった。

「よっしゃ。」

勝ったと思って力を抜いた瞬間、

「パワーはあるが、甘いんじゃ。油断してはならぬ!」「ウォーター」
ゴフッ!

直で水の玉が腹に当たり、意識を失った。

・・・リカバロ・・・

「・・・ん?」

校長と目が合った。

・・・プフッ

「コホン、なぜ君が負けたか分かるかね？」

校長は俺の目を見つめた。

「確かに君は強いが、わしが弱そうだと油断していたじゃろ。それが原因じゃ！」

どんな相手も勝手に自分で判断するのは身を滅ぼすんじゃ。みなも覚えておくように。」

キンコーンカーンコーン

後であるとき校長は結界を張って攻撃を防ぎ、飛んで俺の後ろに回ってから水の玉をぶつけた、とウィルトに教えてもらった。

「ああ、君とルーンちゃんは校長室にくるんじゃ。」

な、なんで?!

西塔の最上階に連れて行かれた。

バタンツ

校長は扉を閉めると、単刀直入に聞いてきた。

「まさか君がマリーの子だったんじゃなあ。」

っ！！

「え！なんでわかったんですか？」

校長は笑顔で答えた。

「そのなんじゃな、雰囲気じゃよ、なんとなく彼女に似ておったから。

ということは、結婚した夫のレンとかいうドラゴンの子じゃったのか。

大きくなったのお。」

それから、ルーンの方を見た。

「君もドラゴンだったなど、入学のときに気付かなかったのお。わしの見る目も落ちたもんじゃない。」

そついつて校長は高らかに笑った。

「君の父とはずいぶん会ってないが、元気にしておるか？」

「はい！お母さんと家にいます。」

親と聞いて、俺は真実を聞くことにした。

「なぜ、父と母は死んで、俺は一人だったんですか？」

校長は急に暗い顔になった。

「それはじゃな、・・・」

ryusuke side out

loit side

それは魔王を5人で倒した後のこと・・・

「アイド、これからどうするんだ？」

「決まってないさ。ロイトは？」

「俺は学校をつくらうと思ってる。
理想の学校をな。」

2人は笑顔になった。

俺は大好きなマリーの笑顔を見た。
彼女と結婚しようと思っ、聞いてみた。

「マリーは結婚とか考えてる？もしよかったら俺と・・・」

「ごめんなさい、もういるの。人間じゃないけど、わたしその方と
結婚するつもり。」

ほんとごめんなさい。」

はじめての失恋だった。

5人はそれぞれの道を歩んだ。

だが、エルソードとマリーとはときどき会っていた。

その時はまだ知らなかった、魔王に子供がいたことなど・・・。

数年後、突然アーノルドと名乗る雄のドラゴンが、子どもを抱えて飛んできた。

「た、大変です！竜王さまとお妃さまがお亡くなりになりました！」
俺は一瞬、嘘だと思った。

「どづいつことだ！？」

「王国に魔王の子供が来たのです。そしてやつはこの子を人質にしたのです。」

王都、ドラディストで・・・

「リユースケを返して！」

「こんなことをしてどうなるか分かってるのか！」

レンは炎を吐こうとした。

「おっと、竜王さんよ、この子を返してほしくば、そんなことをしないほうがいいよ？」

レンは悔しそうに口をとじた。

やつはマリーを指さした。

「お前らのせいで、僕のお父さんは死んだんだあ！父親を殺された気持ち、
わかんのかあ！！ああ？アーリーとかいう魔術師は殺したよ。死にざまは最高だったねえ。
僕が望むのは、お前らの死だ。自殺してくれればこの子の命は助けてやる。」

2人はすぐに答えを出した。

「いいでしょう。だからリユースケを傷一つつけないように。」

「さあ、さっさと僕の前で消えろ！」

「あなた、愛してる。」

「俺もだ。」

そう言い残し、2人は自分の腹に突き刺した。

グシャッ！

2人の赤い液体が飛び散った。

「ふはははは。父の仇をうつたぞ。」

そういったとき、突如やつの体に光が取り巻いた。

「ちくしょおおおお！あの賢者、封印の罫しかけやがったなあああ

?!

ぐはああああああああ!」

そうしてやつは封印された。

・・・というわけで、この子を連れてきたのです。」

「そうか、アーリーとマリーは死んだか。」

友を2人失ったことを1度に知らされた。

「もし封印が解けたとき、この子も狙われる。
この子を科界に送るんだ!」

「はい!」

そうして俺はリユースケという子を、科界に送った。

l o i t s i d e o u t

r y u s u k e s i d e

「・・・そういうことだったんですか。
俺のせいで父と母は死んだんですね。」

俺が死んでいれば、助かった。
そう考えると、胸が痛くなった。

「いや、君は悪くない。悪いのは魔王の子じゃよ。」

校長がやさしく手をかけてくれた。

「もう今日は帰るんじゃ。そして明日も学校に来るんじゃぞ。」

ルーンとユータと3人で家に帰ることにした。

第5話 校長の過去（後書き）

評価して下さるとうれしいです。

第6話 ドラゴン退治(前書き)

どうも、かなり更新遅れてすみませんm()m

いやあ、でも夏がきましたね〜

蝉がうるさすぎですわ。

「五月蠅」でうるさいでなくなくて

「七月蝉」でうるさいに変えたほうがいいとおもいますw

ちなみに、蝉は耳が良くないそうです。

ほんと、迷惑なやつですなあ

第6話 ドラゴン退治

6月

入学してから2週間が過ぎたころ、大変なことになっていた。家はとてつもなく大きく、外から見れば優雅な暮らしをしていそうだが、
実際貯金はほとんど無く、豪邸で庶民以下の生活を強いられていた。だが、今日ついに金が底をついたのだ…。

「竜介、どうすんねん？このままじゃ、飢え死してまうで?!」

たしかにこのままだと全員死んでしまう。

俺たちはかつてない危機に直面していたw 笑い事じゃねえよ!

「ないなら稼ぐしかないですね…。この際、ギルドに行ってみましょ」

やっぱりこつこつ世界だから、ギルドとかあっちゃうんだねえ。

ウィルトも誘って、街のほぼ中央に位置するギルドへ向かった。

「しかしなぜ我がおぬしらの金稼ぎに付き合わなくちゃならぬのだ

「??」

ウィルトは不満を口にした。

「俺たち友達だろ」

たしかにそうだが…と渋々納得した。

友達サイコー＼(＾o＾)／ お前はサイテーですなw

4人は依頼が貼っている掲示板の前にきた。

「これなんか、いいんちゃう?」

裕太が指差した依頼は、

ランク C 報酬 1S

畑を耕すんで、手伝ってください。

「「却下!」」

裕太はガクツと頭を下げた。

「これなんかどうだ?」

ランク A 報酬 30G

森の奥で潜んでいるドラゴンを討伐せよ!

「ぜーったいに無理です！そんな可哀想なことできるがわけないで
しよー！！」

それよりも、こちらにしましよ。」

ランク S 報酬 100G

崖に住み着くフェニックスの群れ（約50匹ほど）を討伐せよ！

しーん……

「ルーンちゃんの可哀想の基準がわからんねんけど……？
てゆうか、不死鳥って倒せんのか？！」

俺もドラゴン退治には反対だったが、裕太の意見はごもっともだと
思った。

討論した結果、ドラゴン退治の依頼にした。

「「これー！」「

依頼の上を二つの手がのった。

「「え？」「

同じ依頼を取ろうとしたのは、赤眼で紫髪の少女だった。

「これは私が先に取ったのよ！」

……………。

「なあ、俺たちとパーティー組まないか？」

報酬は山分けってことで。」

ルーンが念話で話しかけてきた。

『やめておきましょうよ、この子魔族と人間のハーフですよ？』

『彼女の言う通り、私はハーフよ。化け物とパーティー組むの？』

え！？念話を読まれた？！

彼女はYes！とも言うかのようにパチツとウインクした。

「竜介、パーティー組むんか？組まんのか？」

俺は彼女に手を差し出した。

「俺達と組もうぜ！種族なんて関係ねーだろ？」

『それに俺も人間と竜のハーフなんだ。』

お前が化け物だったら、俺も化け物になっちまうだろ？」

彼女の目から一粒の涙がこぼれおちた。

いままで自分を受け入れてくれる人などいなかったのだ。

彼女は涙を拭くと、俺の手を取り、握った。

「わたしはメアリー。メアリー・エスパワー。
見て分かると思うけど、半分魔族よ。」

「俺は佐藤竜介。」

「川島裕太。よろしくな！」

「ルーン・アーノルドです。」

「我の名はウィルト25世だ。」
順番に自己紹介した。

「では」

「いきますか。」

5人は森へ向かった。

「暗っ！」

森は木々が影をつくり、暗かった。

「フッフッフ、こんなこともあるつかと……」

裕太はリュックの中をガサガサとし、やがてプラスチック製の筒を取り出した。

「じゃーん、懐中電灯〜！」（某ネコ型ロボット風に）

パチッ

筒の先から光線がでた。w

今考えると、懐中電灯って結構すごい発明品だな〜

「お、おぬし、光属性も使えたのか!〜!」

ウィルトとメアリーが驚いていた。

「いや、これ魔法じゃなくて、科学やねんけど。」

裕太は説明したが、ウィルトとメアリーには理解できなかった。

その後は魔物をウィルトに倒してもらいながら、順調に進んだ。

「だいぶ奥まできたわね。」

みんなで一息つこうかと思ったそのとき、

「ぐおおおおおん!〜!」

1匹の赤竜が現れた。

俺とルーン以外は戦闘態勢にはいった。

人間め、殺してやる！

赤竜は炎を吐いた。

やめなさい。

赤竜は炎を吐くのをやめた。

人間が偉そうに…ってこの声はルーンお嬢様?!それに隣のそちらの方は…

竜介だ。

赤竜は頭を下げた。

オウイデイウスと申します。この度は本当にすいませんでした。まさかルーンお嬢様と竜王子がこんなところにいるのって思いませんでした。どんな罰でも覚悟します！

「竜介、このドラゴンと喋れんの?」

俺は裕太を無視した。

罰なんていいんだけど、お願いがある。

俺らに倒されるふりして国に帰ってくれないかな？

そんだけでいいんですか?! ありがとうございます!

交渉成立ですね。

「よくもはむかったな、ドラゴン。俺がお前を倒す。」

「リユースケくん、台詞が棒読みなんだけど?」

俺はオウイディウスに飛び乗り、頭をぺちぺち叩いた。

「ぐはああ」

オウイディウスは、なんとも嘘っぽい悲鳴を上げ、南へ飛び去った。

ばればれの八百長だなあ。

「おぬし、すごいな!」「ほんまに!」

……気が付いてない人が2人もいた。

5人はギルドに戻って依頼達成を報告し、30G受け取った。
一人6Gずつに分けた。これで結構もつだろう。

「では、学校で会おう。」

「言い忘れてたけど、私リユースケくんたちと同じDクラスなの。
また学校で会いましょ。」

「じゃあまた。」

俺達3人はウィルトとメアリーに手を振った。

その晩、久しぶりに御馳走を食べた。

第6話 ドラゴン退治（後書き）

後書きゲスト登場コーナー！

えー記念すべき第1回目のゲストは裕太くんですー

「どーもー、でもなんで主人公より早いん？」

別にそんなことどーでもいいじゃないですか。

それより、PVが1,000アクセスを突破しました。

「ふーん。」

……反応薄くないですか？

「お前文才ないねん。」

…心にグサリッ

「そうそう、HPはひつとぼいんとやけど、

MPはまじっくぼいんとじゃなくてまじっくばわーやねんで。」

へ、へえ〜……

「あの子、もう帰っていい？」

ああ……………どうぞ。

作者はかなり落ち込んでおります。

評価・感想の方よろしくお願いします。

待ってます…

ちなみに1C≒約10円、1S≒100C、1G≒100Sです。

1Gは10万円くらいですかな

第7話 夏休み前（前書き）

いやあ、感想嬉しいです。

もう感激です。

読者が1人いるってことだけでも感激ですよ。

今回は夏休み前の話なのに、イベント詰め込みまくってます。
なのに短い…。

サーセン。

第7話 夏休み前

アイト王国の6月は、梅雨が無く、比較的過ごしやすい。だがやっぱりアレは無くならないみたいだ……
依頼を達成した次の日、先生からアレの話をした。

「えーと、来週は魔法試験です。皆さん一生懸命勉強して下さいね？」

ということ、テストがやってきた。

つーか、こっちの世界でもテストってあるんだ〜

「てことでメアリーと遊ぼうと。」

俺が家から出て行くこうとすると、

「だめですリユースケ様！3人で勉強しましょう！！」

「勉強？ナニソレおいしいの？」

「テストで赤点とると、学年上がりませんよ？」

あがらなかつたら、上がるまで2年生ですからね！」

それから俺は渋々勉強した。

生まれてたぶん初めて1日1時間勉強した。

……え、少ないって？いやいや魔界の学校は3教科だからね、むしろ多いくらいだな。

まず、アイド文字を覚えることにした。

パツと見ただけでは、チンブンカンブンだが、和アイド・アイド和辞典を見ながら

日本語に訳していくと、すんなり覚えることができた。

おお、意外と簡単じゃん

今度は社会の教科書を眺めた。文字を見つめるだけで暗記できた。

1時間教科書を隅々までみた後、眠たくなった。

…おやすみ（- -）ZZZZ

で、迎えたテスト本番。

俺は勉強したかいあって、スラスラとけた。

テストが終わると、ウィルトが余裕そうな顔をしていた。

「あれ、ウィルト今回よかったのか？」

「ああ。我をなめてもらっては困る。」

さすがは王子だなあ。
まあ、俺も一応王子だけど…。

次の日、テストが返却された。

「では発表します。第2学年1学期魔法試験の点数、
第1位 ユータ・カワシマ 298点
第2位 リユースケ・サトー 297点
第3位 ピエール・ニアス 284点
です。なんと1位、2位はDクラスです！よく勉強しましたね？」

………すげえ。

入学してまだ1か月も経ってないくらいなのに……

「さすがは裕太だなあ。」

俺が感心すると、裕太は不思議そうに俺の顔を見た。

「竜介って、そんなに賢かったん？」

「いやまあ、勉強したから…。」

1回見ただけで覚えてしまうというのは秘密にしておいた。

自信たっぷりだったウィルトは、3教科合計で23点だった。

「くっ、父上にあわせる顔がない…。」

…そっとしておいてあげよう。

ルーンは178点と平均的、エミリーは229点とまあ良い方の点数だった。

で、放課後5人でうちに集まった。

「この家広いわね。」

「うむ、確かに。まあ、我家ほどではないがな。ハハハ。」

いや、お前の家は城だろっ！！
と思わずつつこみそつになった。

「今日集まってもらいましたのは、2週間後の夏季休暇についてです。」

そっか、もう夏休みだったな。

「せっかくですので、5人で遊びに行こうと思うんですが、そこです、山か海どちらに行くか決めたいと思いますっ！！」

4人ははしゃいだ。

「俺やっぱ海がいい！」

「我は山だ。やはり夏は山であろう。」

「私も山がいいです。獲物がいっぱいそう」

「私は海…かな。な、なんとなくよ。」

俺を除いた4人で意見は真つ二つに分かれた。
俺の1票で、全てが決まる！

さあどうする？さあどうする俺？！

パニックだったところで、裕太が耳元で囁いた。

『海なら、2人の水着姿見れんで』

悪魔の囁きに反応してしまった。

みずぎかぁ。

想像すると鼻血が出そうになった。

危ない、危ない。

うん、決めたぞ。

迷わず俺は答えた。

「海いだあああああ！」

それから2週間、夏休みが来るのが楽しみで楽しみで仕方がなかった。

授業中も海のこと頭がいっぱいになった。

「おい、リユースケ！先生の話を聞いているのか？
全く、いくらテストでいい成績とっても、
授業聞いてないんだったら授業点下げろぞ！」

しかし、先生の言葉は右の耳から左の耳へ抜けていった。

ただぼーっと窓の外を眺めるようになった。

ダメだダメだ、俺は変態じゃないんだ！
落ち着け、落ち着け。スーハーーゴホッ

2週間が経ち、終業式がやってきた。

やつほーい、夏休みだあ

飛び上がって喜んでいると、先生から余計な物を渡された。

ドサツ

「ん、何これ？」

「夏休みの宿題です？」

まず国語テキスト70ページ、社会テキスト85ページ、魔法テキスト100ページ、

そして読書感想文原稿用紙5枚×2、戦闘のレポート1枚、自由研究3つです。

きちんとやっておいってくださいね？」

…… 飴と鞭を渡された。

あは、あはははは。

宿題は置いて、3人で買い物に行くことにした。

「今日は何を買った？」

ルーンは笑顔で答えた。

「武器です。」

「え、銃刀法違反になるやん！」

「ここは日本じゃないんですよ？」

そうこうしているうちに、市場に到着した。

ルーンは、エルフの店に行った。

裕太は、「買物はめんどいねん、パス」といって、店の外でPCゲームをしていた。某MMORPGだ。

「…いらつしやいませ。」

緑色の服をきたエルフが言った。彼は耳がとんがっていて、肌の色は白かった。

「おすすめありますか？」

ルーンが聞くと、エルフが丁寧に答えた。

「これなんかどうですか？お安くしときますよ？」

そういつて、真黒な剣を取り出した。刃は黒く輝き、キラリと光っている。

持つところには、一漆黒の剣《jet black sword》と刻まれていた。

俺はその剣の魅力に魅かれた。

「これいくらですか？」

「15Gくらいですな。安くして10Gです」

高っ！無理無理、買えるわけがな

「これください。」

ええー、買っちゃうの？！

あと4Gと50Sしかないじゃん！

トホホ、またあのボンビーな生活に逆戻りかあ。

俺は漆黒の剣を受け取った。剣がさらに眩い輝きを放った。眩しいから鞘になおした。

さらにルーンは2Gで盾を買った。

表面にはいろいろな模様が彫られているが、硬くできていて、中心にはダイヤモンドが埋め込まれていた。

後は裕太に短剣と盾を買った。

で、買い物終了。

え、兜は？ 鎧は？

なにより、ルーンの武器は？

ルーンに尋ねると、

「ああ、鎧なんか着てると、動きが鈍りますよ。

それに私とリユースケ様の皮膚は、だいたいの剣は通しませんから。」

「

そっか……

って、じゃあなんで盾買ったんだよ？！

「え、だってかっこいいじゃないですか」

そついうのを無駄遣いっていうんだよっ！

そんなことより、明日は海だあー！

第7話 夏休み前（後書き）

後書きゲスト登場コーナー！

今回のゲストはウィルトさんです。

「なぜ我をこのような場所に呼んだのだ？」

まあまあそう言わず、よろしく頼みますよ

「質問だが、なぜ最後で買い物のネタなんだ？」

いやあ、いずれは出そうと思ってたんですけど、
タイミング間違えちゃいました？

執筆終わったら、文字数が少なかったんで、つい入れちゃいました。

111

「ふむ、やはり貴様は小説は向いてないと思うぞ。」
がーん！

「まだまだ力不足だと我は思う。いまから頑張っておれば良い！」

そうですね、頑張ったら大丈夫×2

「まあ、頑張っても駄目なものは駄目だがな。」

…人がやる気だしたのに、そういうこと言わないでくださいよ。

はあ、次回は女の子連れてこようよ。

「主人公の俺は?!」

いらないでしょ。

「なんでだよ!」

第8話 夏休み？（前書き）

しばらく空けてましたことをお詫び申し上げます。

しかし、将来がかかっているので、今後も長いこと更新しないと思います。

連載停止はしないですよ

第8話 夏休み？

俺たちは、海までの移動手段について話し合っていた。

「で、南にある海までどうやって行くの？」

「俺とルーンの背中に乗って行くってのは？」

飛んで行けば、30分以下で着くだろう。

「はあ！？乗ってどうすんや？」

「だから背中に乗って飛ん「わあーわあー！！」「ん？」

ルーンは大声で叫んだ。その声は、部屋いっぱいに響いた。

『言っちゃだめですよー！』

『そっかそっか、うかつだった。』

「やはり、歩くしかないんじゃないでしょうか？」

「無理やる。そこまで50kmあるんやで？！」

みんなはため息をついた。ウィルトを除いて…

さっきからウィルトは黙りこくっていたが、落ち込んでいるわけではなく、

どこか嬉しいことを隠しているような様子だ。

「王子も何かいい方法ない？」

メアリーが質問すると、待つてましたとばかりに答えた。

「ハツハツハ、まかせたまえ！我にはこれがある。」

そう言つて取り出したのは、薄くて赤いじゅうたんだった。

そのじゅうたんには、いかにも高級感あふれる刺繍が施しており、ちょうど5人が乗れるほどの大きさである。

「これ、いくらしたんだ？」

俺は恐る恐るきいてみた。

最低でも100万円はするだろう。

「150Gくらいだが。」

ウィルトはさらつと答えた。俺はさつと計算した。

えーっと、1Gは10万円で、150Gは1500万円かあ

…イヤイヤイヤ、桁違いじゃねーか！！もはや国宝級だろ?!恐れ

多くて乗れねーよ！

結局、他に行く手段が見つからなかったので、ウィルトのじゅうた
んで行くことになった。

「ええと、持ち物は水着とテントと水筒と食材と武器と…これでよ
し」

「よくねーよ！！」

おもわず突っ込んでしまった。

「なんで武器なんかいるんだよ?!」

「護身用です。さあどうぞ。」

そういつて、裕太は短剣を、俺は漆黒の剣(jet black
sword)を渡された。

俺は剣をしぶしぶ腰にさした。

じゅうたんは心地よかったが、なんとか傷をつけまいと必死になり
すぎて、

ぜんぜん楽しめなかった…。

1時間ほどじゆうたんてとんでいると、磯の香りが鼻をついた。
青い海に青い空、そして白い砂…

海キタ

(。 。)

「私たちは更衣室で水着に着替えてくるので、先に遊んでいてください。」

俺たちは海に飛び込んだ。

魔界は科界とちがって環境汚染がない。そもそも汚染させる物が無いのだ。
よって、汚れというものを知らないここの海は透き通っていて、浅いところは
海底が見えるほどである。

しばらくすると、女子たちが帰ってきた。

ルーンは白と黒でフリフリがついた水着、メアリーは青の水玉模様の水着を着ていた。
そしてとても輝いていた！ってない言ってた俺？！

「おまたせ。ユータ、似合ってるかしら？」

ぶぶ つ！

メアリーが裕太に聞くと、裕太は鼻血を出して倒れた。

「私、何かしたかしら？」

「君たちが眩し過ぎたんだ まあ、我ほどではないがな」

「ユータさん、大丈夫ですか？」

「我を無視する気か？」

「私たち、ユータをテントまで運んでくるわ。」

「……………」

メアリーとルーンは裕太を浮遊魔法で運んで行った。
ウィルトはその場で崩れ落ちていた…。

自業自得だな。

1時間後、祐太が復活した。

「なあ、みんなでさ、あの島まで競争しよーや。」

多数決をとり、4対1で賛成に決定した。

（その1が俺であることは言うまでもないが。）

全員が砂浜に着く。緊迫した空気が流れ、辺りがしんとなる。

「よ　い、ドン！」

5人が一斉に小島に向かって泳ぎ始めた。

が、俺は競争などしたくなかったから、適当に泳いでいた。

隣で女たちの壮絶な戦いが繰り広げられてるとも知らずに……

r y u s u k e s i d e o u t

m a r y s i d e

「よ　い、ドン！」

私は思いっきり地面を蹴った。水泳には自信があった。

100m自由形で34.2の記録は、みんなに恐れられるほどだったから、この女には勝てる！

そう確信した。

100mほど泳いだところで、辺りを見回した。

「ふん、竜といえども、私には勝てなかったようね。」

なぜこんなにルーンに敵意むき出しなのか、自分でもわからないが、あの気持ちは
忘れることができなかった。

いつもリユースケにつきまたって親しく話している姿を見ると、胸の奥が苦しくなった。

「私より、ルーンのほうがリユースケとつきあいが長いんだから」と自分に

言い聞かせるが、このままではリユースケがとられると想着てしまった。だからこそ、

アピールして、あの女に勝つと誓った。

余裕で泳いでいると、10mほど先でルーンが水上に出てきた。

「お先に〜。ふふふ」

「そんな、100m以上潜水なんて、ありえないわ!」

「ここまで30秒ほどで泳ぐあなたに言われたくないですね。」

「負けないわよー!」

「私のほうこそー！」

足を動かす速さを2倍にした。負けるわけにはいかない！

最初はルーンが勝っていたが、徐々にメアリーが優勢になり、追い抜いた。

すると、ルーンも負けじと、メアリーを追い抜いた。

そうこうしていると、小島が見えてきた。ラストスパート、全力で泳いだ。

時速100kmはあったと思う。

タンツ

二人が同時に岩に手をついた。

「私が先だったわ！」

「私が先です！」

「あきらかに私よ。私のほうが速かったわ!!！」

「じゃあ、リユースケ様に決めてもらいましょ。」

往生際悪いわね。まあでも、リユースケは私を選ぶわ。絶対そう

よ！

3分後に、王子、ユータの順番でついた。

5分後、ゆーっくりゆーっくりとリユースケがついた。
ふふ、いよいよ私が勝つ時だわ。

m a r y s i d e o u t

r y u s u k e s i d e

小島に着くと、ルーンとメアリーがにらみ合っていた。なにやら険悪なムードが流れているのが察知できた。さて、どうすっかな。

「私とルーン、どっちが速かった？」

…はい？

「だ・か・ら私とメアリーさん、どっちが速かったかってきいてるんです！」

「いや俺見てないからしらねーし。」

二人茫然としたが、徐々に表情が怒りに変わっていった。

「……信じられない。」

「…最低です。」

…はい？どういうことだ？だれか説明してくれ！
俺まじいこと言ったかあ？

バチンッ バツシャーン！

Wパンチを食らった後で、海に突き落とされた。

夜はBBQをした。あいかかわらずふたりは怒っていた。

裕太がふと言った。

「あ、チャッ マンないやん！」

そういえばそうだ。まるつきり忘れていた。

「チャツ マン???なんですかそれ?それよりも火つけるんで、リ
ユースケ様と

ウィルト様は風の魔法で手伝って下さい。」

「ファイ」

まきに火が付き、パチパチと音をたてて燃え始めた。火はゆらゆらと踊っているように見えた。

「「ウイン」」

俺とウィルトは風を送り込む。

そのうち、網の上の肉がこんがり焼けてきて、あたり一面にいいおいが広がった。

「さあ、じゃんじゃん食べちゃって!まだまだあるから。」

途中まで気にしないで食べていたが、だんだんルーンの食べ方が気になっていった。

「なあ、おまえもつと丁寧に食べるよ。」

するとルーンは口に油をたっぷりつけながら言った。

「いいじゃないですか、がつがつ、おいしいんですから。パクパク、ちよっとストレスが溜まっているんです。はむはむ、早くしないと、がつがつ、無くなっちゃいますよ」

はあく、なんか女子ってこごじゃないと思っつ。

夜は男女別れて寝ることになった。

「異議あり！みんなで寝た方が良いと思うのだが？」

「却下。王子なんかと寝たら、むさくるしいわよ。」

∴ ウィルト撃沈。 乙でーすw

俺は布団にもぐるが、眠れないでいた。

「なあ、何かおもしろい話はないか？」

ウィルトが急に尋ねた。

「怪談話やったらあるぞ。」

「ほづ、話してみよ。」

「ある学校に、クラスでいじめられてる子があってん。でな、その子はある日嫌になって首吊って自殺してん。その日からクラスみんなは、いつも変な空気が流れていたねん。」

「なあ匠、今日肝試ししねーか？」

「いややめとくよ。最近この学校でも幽霊みたいなものいるっていうし。」

「はは、びびっとんか？まあいいけどな。」

「び、びびってなんかない！よし、僕も行く！」

だがこのとき断っておけばよかったと、僕は後悔した。

深夜0時、裏の門から学校に侵入した。

廊下を歩いていると、なぜか後ろから視線を感じた。しかし当然、振り返っても誰もいない。

コト コト コト

二人の足音だけが廊下に響いた。

「な、なあ、だれか後ろからいるような気がするんだけど？」

「気のせいだろ。それより、ここはいるぞ。」

ガラガラガラ

扉を開けると、生温か〜い風が吹いた。背筋がゾクツとした。

「なんか変だよ。やっぱりやめよう。それにこの部屋ってあの子が自殺した……」

「ここまできて何言ってるんだよ。ほら行くぞ。」

背筋が凍りつくような思いで部屋に入ると、僕らは叫んだ！

祐太は顔の下から懐中電灯を当てて言った。

「なななな、何と叫んだんだ?!」

ウィルトはガタガタ震えていた。意外とこついうのに弱いのか？

「でな、2人はこう叫んでん。「怨念がおんねん!」と!!!」

「……。」

…オチギャグかよ！ホラーでも何でもねーじゃねーか！！

3人は裕太のしょーもないギャグで眠りについた。

第8話 夏休み？（後書き）

後書きゲスト登場コーナー！

今回のゲストは、ルーンちゃんです。

「よろしくおねがいします。」

さてですが、思うことはありますか？

「題名をかえたほうが良いと思います。」

なぜにー！！

「いやあの、文法的に変です。日本語訳が「魔界へ行こう」のつもりなら、「Let's go to Magic World」ですよ。

このままだと「魔界へ
行け！」になりますよ?。」

なるほど、ごもっともな意見ですなあ。

「2000アクセス突破記念つてことで題名を変えましょう。」

いや、2000アクセスは結構前なんだけど…

一人じゃ決められないなあ。

ていつひ、

1、きちんと「Let's」を入れるべきだ！

- 2、このままでいいです
- 3、もっとマシな題名考えろ！
- 4、作者はセンスないから俺が決めてやるよ
- 5、小説やめろ

を番号書いて（4はその題名も）、送ってくださいませ。
よろしくお願いします。

第9話 夏休み？（前書き）

この間、ユニーク1（0）なのに、PV50以上になってました。

これバグかなあと考えたけれど、やっぱり1人で50以上ご覧になってくださったってことですよ。有難う御座いました。

さて、今回もグダグダですのでご注意ください。

魔法とか期待しているかた、ほとんど無いのであしからずm（

ー）m

第9話 夏休み？

次の日のこと、

お土産を買おうと5にんで海辺の町を歩いていた。

「か、かあわいいい！」

メアリーが貝殻のネックレスを指してはしゃいだ。

「ん〜どれどれ、いいなあ。いくらだろ？」

そっいつて俺は視線を移した。

「た、高っ！！！」

「リユースケ、買ってよ。」

「無理拒否断る。こんなものに75Sはないない！俺が拾ってきて作ってやるよ。」

「ええー、ケチ。」

メアリーが口をぶく〜と膨らませた。

「みんなの所持金いくらだと思ってんだ？！」

「私は50Sしかないわよ。」

「俺も50Sだよ!」

「私は1Gぐらいです。」

「我はクレジットカードだ。上限100Gくらいあるぞ。」

「みんないいなあ、おれ80Cしかないねんけど。」

なんか裕太がかわいそうw

とりあえず俺はウィルトに気になることを聞いてみた。

「この世界にクレジットカードなんてあるの?」

「ああ、カードに魔法が掛かっていて、この全世界で使える。導入していない店はほとんど無い。」

「いいじゃんそのカード、いくらなんだ?」

「入会費30Gに月額5Gってとこだな。かなり便利だぞ。」

なんだその、一般庶民から遠くかけ離れたものは……

俺たちは一生使えねーじゃねーかorz

でまあ、町を歩くけど、これがなかなかいいものが見つからない。

校長にでも買っていてこうと思ったのに…

校長だから予算を1Sくらいに設定すると、ここらじゃ2品くらいしか

みつからなかった。さすがに観光地だなあ。

で、まず一つ目が、海岸の砂が入ったビン。よく考えたら、すぐ手に入るだろ！
つてなつたが、47と中途半端な金額なので保留。

んでもってもう片方が海の絵が描いてあるお皿。魔法の仕掛けがしてあって、たまにお皿が跳ねるのだ。食べ物盛っていたら大惨事になるだろうが、それはそれで面白そうなきがするW1S20Cと少し予算オーバーだ。

俺はお土産屋さんの中で、二つの商品を見比べ判断していた。

「その剣、見せてもらえませんか？」

突然、見知らぬ男に声をかけられた。

「あなた、誰ですか？」

ルーンが率直に聞くと、男は笑顔で答えた。

「申し訳ありません、わたくしはインテ・スクーラーと申します。
ロイトナ王立魔法大学の

もので、魔法武器の研究をしております。というか、そちらの方は……」

インテはウィルトを見て、驚いていた。

「我はウィルト25世だが、どうかしたか？」

「いえいえ、王子様がこんなところにいらっしやるなど、思いもよりませんでしたから。」

まあ、普通そう考えるわなあ。

俺は漆黒の剣(jet black sword)を渡した。
インテはジロジロと眺めた。

「こ、これは漆黒の剣(jet black sword)じゃないですか!」

「ああ、それ10Gもするんですよ。大切に見て下さいね。」

忠告すると、インテは驚いた。

「10Gなんてとんでもない、5000万Gはくだらないと思いますよ……!」

5000万Gってことは……5兆円!

「どづいつことだよルーン！」

「ああ、あそこは私たちの国がかなりお得意様ってことになってるんで、かなり安く売ってもらってるんですよ。」

し、しらなかつた。いま俺の横にあるものが魔法のじゅうたん30枚以上の価値があつたなんて…
安くつてか、4999万9990G引きはいくらなんでもあり得ねえ。

「見せていただいて、ありがとうございました。」

インテはぺこりと頭を下げると、さっさと立ち去った。

結局、俺はお皿の方を選んだ。あの校長が驚く顔が早く見てみたい。
(^o^)/

あとは自分用にも、食べると「痛いっ」て言うクッキーや、動く絵などを買って、
残金が300くらいになった。はあ、またクエスト受けるかな。

「リユースケ様、プレゼントです。はい、どづぞ。」

「あ、ありがとな。」

包装紙を開くと、中には竜のキーホルダーが入っていた。表面がほんのり光っていた。

「言いたいことがあります。」

ルーンの目が宝石のようにときめいていた。なんだ、この展開?!何なんだ?

「実は……」

ごくっ

唾を飲み込んだ。

「実はリユースケ様のことがす「言わせるかあああああ!」
メアリーが割り込んできた。

「私からも、渡したいものがあるの。」

俺はメアリーから、丸い箱を受け取った。

「なんだこれ?」

「いいから、開けてみてよ。」

がんばって正論を述べたが、さらにヒートアップさせてしまったよ
うだ。

「キーホルダーは良くて、靴下はいらないの？」

あんなの、ダサイじゃない。汚くて、今にも壊れそうだわ！」

「フ、負け惜しみですか？」

「キーー！ムカつくわー！」

そろそろ止めないと、やばいことなりそうだ。

「我に任せろ。キリッ」

ピースをした後、ウィルトが戦場に行った。

「君たち、喧嘩はやめたまえ。我で十分であろうっ？」

はぐ、あいつを信じたのが馬鹿だった。

「「黙れ、ナルシスト馬鹿！」」

バコンー！

二人同時に殴られ、ウィルトはダブルパンチで吹っ飛んだ。幸い、
海の上へ落ちた。

お、恐ろしい… 誰か、止めることのできるやつ、いないのかあ！

「俺に任せときつ。こんなこともあるつかと…」

裕太がバツクの中から時計らしきものを取り出した。

「じゃーん、時計型麻醉銃や。」

「それどつかで聞いたことあるんすけど…」

「大丈夫や、ア サ博士のとは違う構造やねん。ちゃんと時計としても使えるけど、

ほかに、ラジオ・ライトの機能付きや。どうや、まいったか？え、まいったか？」

どう違うのか知らないが、一応突っ込んでみた。

「あのさ、ラジオ放送はこの世界にないし、ライトも魔法で代用できるけど…」

裕太がフリーズ状態になった。

「と、とにかくこれで眠らせるんや。」

2人めがけて発射した。

プチ プチ

「ぶざけないで、こ…ふにゃあ」

「ど、どうしたん…んあ」

2人はぐっすり眠っていた。

「うん、眠ったな。」

「見てらんと、今のうちにじゅうたんに運ぶんや。」

浮遊魔法で2人をじゅうたんに乗せた。

「行くうや。」

「なーんか、忘れてるような気がする…」

「え、バッグも持ったし、お土産も積んだし、なんも忘れて無いやろ。」

「かなあ？」

じゅうたんはふわりと浮きあがると、北のライトに向かって飛んだ。

そのころ、海から岸へ、必死で泳いでいる男がいた。

「ま、待てー、我をおいてくな、それは我のじゅうたんだぞー！」

俺たちがそれに気が付いたのは、ライトについてからのことだった。

第9話 夏休み？（後書き）

あとがきゲスト登場コーナー！

今回のゲストはメアリーちゃんです。

でもって同時に「タイトル変更?!総選挙」の中間発表をします。

「それ、今名前付けたでしょ?」

あ、バレました?

ともかく発表します。

ダカダカダン、1は、0票!

「0?じゃあ次はどうなの?」

一挙に発表します。

2は、0票!

3も、0票!

4も、0票!

5は...

「い、言わなくていいわよ。」

はあ、一つも届いておりません。ううっ

何故でしょうか？私皆さんに嫌われているのでしょうか？

「単にこのコーナーの人气が無いってだけじゃないかしら。多分、みんなことばして読んでいるんだわ。」

それに、読者が減っているって事もポイントね。」

なるほど、ではどうすれば!?

「このコーナー潰して他のところで宣伝するとか、執筆能力上げるとかね。」

はあ、無理ですよ、これ以上無理ですよ。

とにかく、まだまだ受け付けております。

感想なくても、1〜4の数字だけで宜しいですから、よろしくお願
いします。

- 1、Let'sを付けたほうがいい
- 2、そのままが一番
- 3、自分で他を考える!
- 4、考えてあげます。
- 5、書くの辞めたら?

お待ちしております!

第10話 夏休み？（前書き）

かなり遅れてすみませんm（ー）m
何分busyなものですから・・・。

特に今は、DSiのうごメモシアターでのハマってます。
「マービィ@」として活動しますので、
よかったらどうぞ。

第10話 夏休み？

帰ってきた次の日のこと、

コンコン

ノックをし、2mほどの扉を開いた。

「校長、お土産持ってきました。」

「おお、君たちかね。まあ、そこに腰かけたまえ。」

俺たちはソファに腰かけて、バッグの中から小包を取り出した。中身が割れないようにしっかりと布でくるんでいた。それをパタパタ開いて、1枚のお皿を校長に差し出した。

「ふむ、良い皿じゃのう。おい、ランチはこの皿で頼む。」

ささっとシェフがやってきて、皿を受け取った。

「かしこまりました。」

何気なく校長室を見回してみた。そういえばあまりこの部屋をじっ

くり見たことは
なかったなあ。北塔の5階にあるこの部屋は、大きさの割に窓が2
つしかなく、
夏は比較的涼しい。よし、冬は来ないでおこう。
壁には歴代の校長の肖像画が見当たらなかった。代わりに、剣をも
った青年の
勇ましい絵が飾ってあった。

「それは、アイドの絵じゃ。」

絵を見てみると、いきなり校長が話しかけてきた。

「何で歴代校長の肖像画はないんですか？」

「なぜって、わしが初代だからじゃよ。もともこの学校は、アイ
ドのために国民が
寄付した城なんじゃが、アイドが断って、何ならと、学校を建てた
んじゃ。」

「へえ、この学校、結構新しいんだ「校長!」へ?」

壁を眺めていると、男がいきなり入ってきた。つたく、ノックぐら
いしろよな!

・・・ってよく見たらインテ先生じゃねーか!

「インテ先生、何でこんな所へ?」

「いやまあ、校長に許可をいただくと思ひましてね。ロイト校長、

隣国の

「コルニアへ行きたいと思いますので、許可をお願いします。」

ほうほう、許可ね。

あれ、ちょっと待て・・・校長ってこの学校の校長だよなあ？

「インテ先生、何で大学の校長に許可求めないんですか？」

「だからこうして求めているじゃないですか。変なこといいますね。」

いや、変なこと言ってるのはそつちだよ？！

「ああ、言い忘れておったが、わしはロイトナ王立魔法学校校長兼
ロイトナ王立魔法大学校長をやっておるぞ。」

校長がぼそつと言った。

「言つのが遅すぎるわあああ！」

で、話を戻して・・・

「君ひとりで行かせるのはちょっとのう〜」

急にルーンがすっと立ち上がった。

「私たちも行きましょう！」

「へ？」

「いいじゃない。行きましょう。賛成だわ。」

「ええやん、おもしろそうやし。」

ええ、めんどいことになりそう。

「我も賛成だ。ちょうど鍛えたかったところだ。」

ウィルトまで……

「ちょっと待てよ。インテ先生に迷惑かもしれないだろ？」

俺は期待のまなざしをインテ先生に向けた。

「いいですよ。私も彼らがいらっしやると頼もしいですし。」

プチンツパン 見事に期待を裏切られた。このKY！

「んじゃ、けってーやな！帰ってさっそく支度するな。」

裕太は勢いよく部屋を飛び出し、家へ向かって全速前進した。

「では私たちも行きますか。」

ソファから立ち上がろうとしたとき、校長に呼び止められた。

「ああ、リユースケくん、ケーキでも食べんかね。」

ギクッ

「いいいいいい、いいです。あはははは。」

「そう言わずに、ふぉふぉ、君の皿に入れておるからのw」

ヤッヅ

「ば、ばれてましたか？」

「いくらなんでもわしを舐めすぎじゃ！こんな魔法具を見分けるくらい、

素人の魔法使いでもわかるわい。」

帰宅。

ルーンが玄関まで出迎えてくれた。

「ど、どうしたんですか、そんなにいっぱい顔に生クリームつけて・
」

「・・・なんでもない・・・」

いくらなんでも、これはやりすいだろう。

明日は早いから、シャワーを浴びてすぐ寝ることにした。

でもって、次の日。

ウィルトがいきなり遅れると言い出した。

「我はちよつと気になることがあるから、先に行つててくれ。」
だそつだ。

インテ先生を合わせた5人は、馬車に乗って隣の国へと向かつてい
る。
道がきちんと整備されているが、それでも車より乗り心地が悪く、
ガタゴトガタゴトと震動が椅子から伝わってくる。

俺はインテ先生に聞いてみた。

「インテ先生、今日は何の目的でコルニアへ行くんですか？」

「以前に私が魔法武器を研究しているといいましたよね。今回、魔王の鎧が見つかったと噂が耳にはいりましたね。」

魔王か……。たしかもう死んだんだよね……。

キキーン

「おわっ！」

急に馬車が止まり、放り出されそうになった。

「どっかしたんですか？」

「検問です。ここから先はコルニアの領土です。」

目の前には大きな川に大きな橋がかかっていて、男の人が何やら話してきた。

「入国許可証をご提示ください。」

インテ先生はなにやら文字を書いた紙切れを男の人に差し出した。

裕太が疑問をぽつりと呟いた。

「あれ、あの人アイド語喋ってるやん。」

すかさずメアリーが質問に答えた。

「あら、あなた社会で習わなかったの？コルニアはアイド語圏よ。」

裕太が納得した。

男の人が橋を通してくれた。

しばらくして、大きな山が見えてきた。

キキーン

「おわっ！」

急に馬車が止まり、放り出されそうになった。

「作者め、使いまわしやがって・・・」

ぐちぐちと余計なことをいう竜介君。

「何してるんですか？行きますよ？」

r y u s u k e s i d e o u t

「へ？なぜここで？？」

余計なことを言った罰。

y u t a s i d e

お、俺なんか？

そんなことよりも目の前にはドラクエみたいなありきたりの洞窟が存在していた。

4人がその中に入っていく・・・って

「ちよつと、待てええええい！」

「どうしたの？」

「どうしたの？じゃないよ！明らかに危険やる！いかにも洞窟が危険ですよ」

「言ってるようなところ、行くような馬鹿おらんやる！！」

「私たちその馬鹿でいいわ。ユータは馬車に残ってなさいよ。」

「え？」

俺は1人取り残された・・・ってなんでやねん！

「待ってくれ、メアリ」。

洞窟内は光源が無く、足元を見ることさえままならなかった。

「くらいな。明かりつけるか。」「フラッシュ」「

竜介が明かりをつけた。

ぱっと前を見ると前の4人が急に震えだした。

「裕太、下は見るなよ！」

へ？見るなって言われたら見るのが普通や。

足元には幅50cmほどしか地面が無かった。

「ぎ、ぎよえええ！」

見らんかったらよかった。

そんな後悔もむなく、足がすくんでしまった。

ガッ

小石がパラパラと落ちた。

ヒュ

ウウウウウ・・・

あれ、最後音しなかったぞ？

ななな、なんでや？

ゆっくり、ゆっくりと1歩ずつ確実に歩き、安全圏にたどり着くことができた。

「インテ先生、もうこんなとこないやんなあ？」

「いえ、まだまだこれからですよ。」

インテ先生はさらっと答えた。

ちよ、勘弁してえや。こんなんじゃ命もたんで?!

作者もなに考えてんだか・・・。

第10話 夏休み？（後書き）

ん？なんにも考えてませんよ。

てことで

後書きゲストコーナー！

今回のゲストはロイト校長です！

「まだやっとなのか、このコーナー。」

第一声はそれですか？

ともかく、タイトル変更？総選挙ですが、今のところ1が優勢です。

このままいくと変更になります。

「もうそれでいいじゃろ、決定じゃ。」

ちよ、ちよっと待ってくださいよ！

きちんと読者の皆さまの意見も聞かないと！

「はつきしいって、あまり票入ってないんじゃろ？」

ギクッ

そ、そんなことないですよ

とにかく、まだまだ募集しておりますので

方法は、感想で1〜5のどれかを書いて送るだけです。

誤字脱字報告、アドバイスもお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0019u/>

Go to Magic World

2011年10月16日14時55分発行